研究論文

アイヌ語系地名の南限と地歴教材開発の可能性
―内なる国際化をめざす異文化理解としてのアイヌ文化圏の調査を中心として―

菊地　達夫

北翔大学短期大学部こども学科

抄　　録

本研究では，高校地理歴史科における地歴融合の地域調査の学習課題に着目し，アイヌ語系地名を手がかりに,時間軸と空間軸の広がりについて,推測できる教材開発を行うものである。

具体的には，歴史学や地理学の研究成果を活かし，アイヌ語系地名の南限として，宮城県仙台市内の案内（アンナイ）地区を特定した。その結果，地域調査の学習課題として，以下の点を到達目標とする学習指導案を開発した。それは，①アイヌ隆盛期以前にも，アイヌ語を話す人々が定住していた可能性に気付くことができること（日本史分野）。②北海道（樺太・千島列島）以南である東北地方（南東北）にも，アイヌ語を話す人々が定住していた可能性に気付くことができること（地理分野），である。

キーワード：アイヌ語系地名，南限，地理歴史科，教材開発，地域調査

Ⅰ．は じ め に

平成25年10月～11月にかけて，内閣府が実施したアイヌ政策に関する世論調査[注1)]によると，アイヌ民族が先住民族であるということ（68.3%），アイヌに関する施策で重要と思うことでは「アイヌの歴史・文化の知識を深める学校教育の充実」(51.3%)，胆振管内白老町に「民族共生の象徴となる空間（象徴空間）」を2020年度までに整備すること（12.6%），アイヌ民族への教育の充実・支援が重要だということ（25.4%）という理解や認識の結果を得た。

アイヌ新法（1997年）の制定以来，アイヌ民族の歴史と文化に関する認識には，一定の成果を挙げている。他方，アイヌ民族の生活福祉の向上には，まだまだ課題は多い。筆者は，その解決に向け学校教育の充実が重要と考えて，教材開発に重点を置いている。中でも，歴史学習ではなく，公民学習や地理学習の教材開発を重視している。昨年は，中学校社会科における公民的分野（道徳）について授業開発を行った。内容として，アイヌ民族の人権問題を取り上げ，専門博物館資料の活用の有用性を指摘した。

本稿は，それに続くものであり，高校地理歴史科における教材開発の意義と内容を示すものである。教材開発が，アイヌ民族の生活福祉の向上に，直ちに結びつくものではないが，その発展として関係性に触れる。それをふまえ，教材開発として，地歴融合の地域調査の学習課題に着目し，アイヌ語系地名を手がかりに，その時間軸と空間軸の広がりについて推測させようとするものである。

Ⅱ．アイヌ民族における生活福祉の向上との関連

本章では，アイヌ民族における生活福祉の向上との関係性を述べる。授業内容は，アイヌ民族の歴史と文化に関する既習事項（歴史的内容）に，現在とアイヌ隆盛期以前といった時間軸の広がり，北海道，樺太・千島列島といった定住地に東北地方を含めた空間軸の広がりに注目する。歴史や地理における不十分な点あるいはその可能性を加えることで，アイヌ民族に関する認識や視野を広げようとするものである。その結果，アイヌ民族の歴史や文化の再評価につながるのではないかと考えた。

これまで，アイヌ民族に対する生活福祉は，日常生活に関する直接の支援を中心としてきた。それ自体，重要であり，一定の効果を上げてきた。生活福祉の問題とする各種の差別は縮小した。ただ，それらが完全に払拭できたわけではない。平成25年北海道アイヌ生活実態調査報告書（北海道環境生活部）によれば[注2)]，「差別を受け

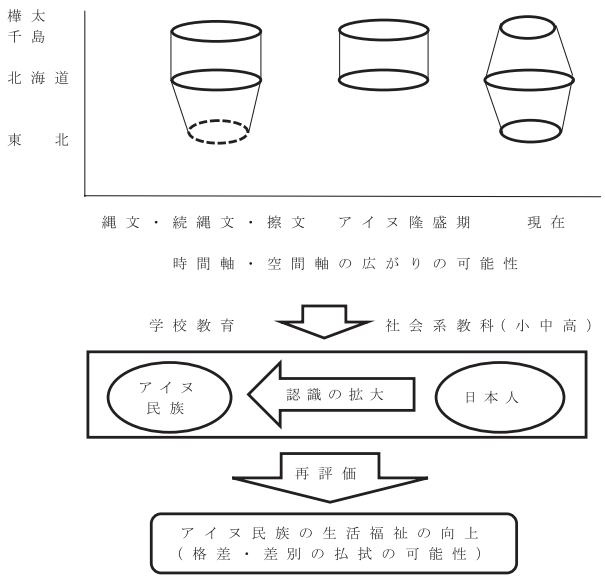

図１　アイヌ民族における生活福祉の向上との関連（構造図）
注）図の上部の図形「円」の大きさは，定住人口の多少を判断するものである。また，線のスタイル（実線と点線）は，定住地（歴史的事実）とその可能性を表すものである

たことがある」と回答した人は,23.4％となっている。ただ，最近６・７年に限れば，1.9％まで減少している（６・７年以前の場合20％）。

それゆえ，別のアプローチも重要と考え，学校教育の内容の工夫に注目した。アイヌ民族に対するイメージは，これまでの学校教育を通じて構築してきた。すなわち，十分なアイヌ民族の歴史や文化に関する学習が展開されなかったことにより，誤解，認識不足に基づくイメージを生んでしまった。その払拭や修正改善に，学校教育の果たす役割は大きい。

その関連を構造図として示す。

Ⅲ．アイヌ語系地名の南限に関する研究動向

１．地理学・歴史学の研究成果

本節では，地理学と歴史学（考古学）におけるアイヌ語系地名の南限に関する研究動向について確認する。

まず，地理学的研究では，以下のような成果がある[1)]。この研究では，既存のアイヌ語地名の研究成果（ナイ・ベツ地名の分布）と考古学の研究成果（縄文土器の分布）を重ねあわせることで，東北のアイヌ語地名の形成年代を特定できることを明らかにした。具体的には，アイヌ語系地名（ナイ地名）の南限は，現在の宮城県仙台市付近にあることがわかった。また，その事実から，アイヌ語地名が，アイヌ隆盛期以前に形成されたことも浮き彫りとなった。よって，アイヌ民族の存在を断定することはできないものの，アイヌ語を話す人々（アイヌ語種族）が定住していた可能性は高いものと考えられる。

続いて，歴史学的研究では，以下のような成果がある[2)]。この研究では，①アイヌ語地名が存在する理由，②命名の時期，③現在に伝わる形で定着した時期，④命名者，⑤定着させた者について考察を行い，東北地方に定住していた人々が，奈良・平安時代の文献に記されていた蝦夷だと考える説（通説）か，様々な物質文化を資料として，文献に記されるような蝦夷はいなかったという説，どちらの説が実態に即しているか，確かめた。その結果，東北地方のアイヌ語系地名は，後北C_2・Ｄ式～北大Ｉ式の続縄文土器使用者の言葉であり，現在に残るように定着させたのは，飛鳥時代以降にそこに移住したやまと言葉話者であったものと考えた。

学校教育に関するものでは，以下のような成果がある[3)]。この研究では，教材としてのアイヌ語地名の広がりについて，既存の研究成果をふまえ，北海道以外の樺太，千島列島，東北地方，関東以西の命名を検討した。その結果，東北地方に加え，関東以西のアイヌ語地名についても，その可能性を否定していない。

以上から，東北地方のアイヌ語系地名は，地理学・歴史学の研究成果より，アイヌ語を話す人々によって，命名されたという共通点がある。ただ，それをアイヌ民族であるという解釈には至っていない。また，アイヌ語系地名の南限は，東北地方にありそうであるが，具体的な地理的位置（境界）には，議論の余地がある。ただ，本稿では，その可能性が最も高い宮城県仙台市付近（ナイ地名）を暫定の南限と解釈したい。

２．「案内」地名の由来

上記の研究成果では，「ナイ地名」の最南端について，具体的な地名が記されていない。そこで，宮城県仙台市付近の「ナイ地名」を探すと旧地名として「案内」があった。現在は，宮城野区東仙台となっているが，今でも一帯の施設名に「案内」の表記を確認できる（図２）。例えば，バス停（図３），公園（図４），会館名（図５），商業施設名（図６・７），案内川（図８）などに残っている。また，町内会も，案内地区の名称をそのまま用いている。この「案内」をアイヌ語系地名の最南端と仮定した。

「案内」地名の「内（ナイ）」は，アイヌ語でいうところの沢（ナイ）と一致する。他方を「案」が何を意味するか不明である。ただ，可能性として，以下のような組み合わせができる。アク（矢を射る，弟，浅い）＋ナイ（沢），アム（爪，寝そべっている）＋ナイ（沢），アム（休憩する）＋ナイ（沢），アン（鷲取り小屋，我らの）＋ナイ（沢），アプ（釣り針）＋ナイ（沢），アル

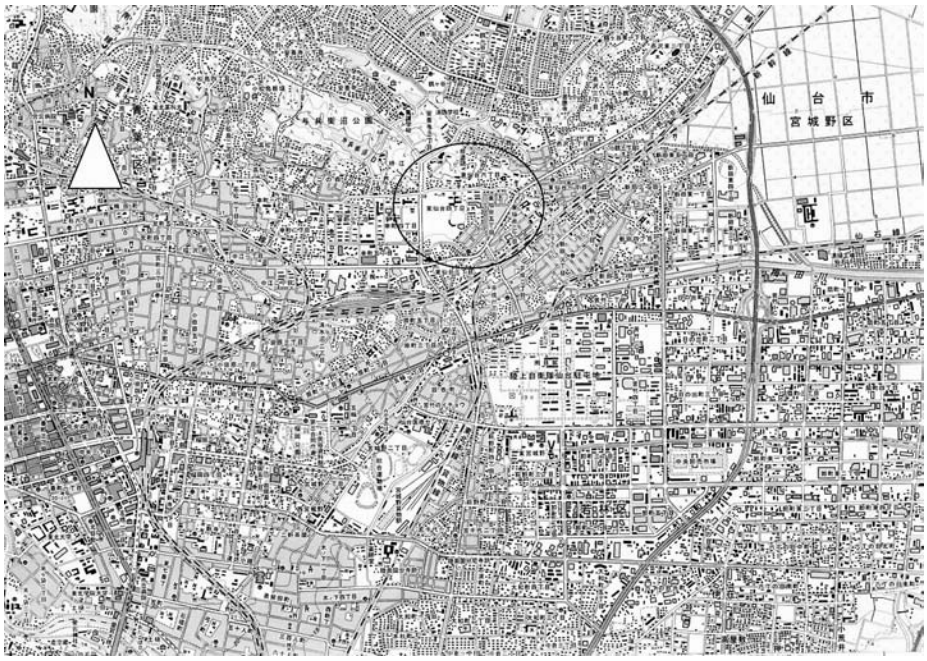

図２　国土地理院発行２万５千分の１「仙台」の一部（加筆修正）
注）地図上の図形「円」は，現在，施設名などに「案内」の地名が残る場所（現在の東仙台付近）

図３　バス停「案内公園前」の様子（2013年10月撮影，以下同じ）

図４　案内公園の標識の様子

（反対側の）＋ナイ（沢），アッ（おひょうにれ）＋ナイ（沢）の７種類である。上記のような組み合わせ地名は，北海道にはない。この中で，最も有力なものが，アル（反対側の）＋ナイ（沢）である。沢は，安養寺の大堤沼を源流とし高野川となって梅田川に合流する部分である。この部分は，泉区市名坂側から見ると，小田原丘陵を超えた向こう側に位置する。よって，地理的環境としては，説明できなくもない。他方，反対側の起点となる主体が必要となる。小田原丘陵を挟み案内（沢）の反対の場所となる。そのあたりに位置するものは，多賀城（陸奥国府）である。この地は，古くから大和文化（大集落跡や富沢遺跡）が根付いている。ゆえに，反対側は，大和文化の地であったという意味で命名したかもしれない[注2)]。

「案内」地名の由来は，アイヌ語系地名の他にも諸説

図５　案内集会所（入口）の様子

図６　案内生花（店名）の様子

図７　案内薬局（店名）の様子

図８　案内川の様子

ある。１つは，「伝える所によれば天正18年の昔，伊達政宗が岩切城（高森城）を攻めようとした時，この地の百姓が道案内の役を務めて戦いを有利に導いたというので，この地を案内と呼ぶようになった」という説。もう１つは，「藩政時代に仙台を訪れる顧客をこの地に送迎して案内した」という説である[注3)]。

以上から，「案内」は，アイヌ語系地名の南限の可能性は高いものの，依然決め手に欠く。一方で，地図上の境界線は，あくまで目安であり，複雑に入り組んでいる可能性も高い。現在でも，境界線は，植生，言語，文化など地理的に混在していることが少なくない。よって，実際には線ではなく，帯状になっている。そうであれば，アイヌ語系地名の由来のように，「反対側の沢」付近には異なる文化が，混在した地域という考え方が正しいかもしれない。

Ⅳ．地歴融合の教材開発の可能性

１．高校地歴融合における教材開発の意義

本章では，前章まで取り上げた研究成果やそれに関連する資料を，教材（調査資料）として用いた開発の意義と内容を示す。具体的には，高校地理歴史科の地理Ｂと日本史Ｂの融合教材（地域調査）を想定した。

すでに述べたように，教材として取り上げる研究成果は，推論の域を出ない。アイヌ民族の歴史や文化に関する歴史的事実を調べる学習は，小学校や中学校社会科で，取り上げる機会はあった。他方，最新の研究成果やそれに関連する資料を利用し，地域調査の教材として用いることは，中学校段階で難しい。よって，高校の地域調査の教材として用いることが望ましいと考えた。地理Ｂまたは日本史Ｂの地域調査は，中学校段階までの地域調査と差別化を求めている。地理Ｂでは，地域調査

において「直接的に調査できる地域の地図を活用して多面的・多角的に調査すること」を指摘している。また，日本史Ｂでは，地域調査（歴史資料の活用）として「今日に残された資料の有効性や限界等の基本的特性を踏まえ，資料から過去の出来事や景観，生活，思想，社会，伝統や文化などを推察させる学習活動を通じて，歴史資料が果たす役割に気付かせ，歴史への関心を高めるようにすること」を指摘している。いずれも，地域調査の高度化を期待したものである。とりわけ，日本史Ｂでは，不完全な資料からの推察への挑戦を望んでいる。

今回の地域調査の学習課題は，事前提示を想定している。地域調査は，本来，生徒の自主的活動を大いに期待できる学習活動である。他方，その自主性に任せると，安易な地域調査の学習課題を選択し，その結果もつまらないものに成りかねない。地域調査は，主として直接できる地域を対象とするため，身近な地域に限定される。その身近な地域は，小学校や中学校において，地理学習や歴史学習の一部として，何度も学習対象としてきた。他方，高度な地域調査と言われても，どのような内容か，生徒はイメージしにくい。

筆者は，それに見合う地域調査の学習課題の設定が，有益ではないかと考えた。地域調査の単元は，地理Ｂ・日本史Ｂともに導入部分に設定されている。この地域調査の目的は，地理（地図）や歴史への関心を高めるために，実施するものである。歴史においては，文化財保護の重要性に気付かせることも含む。一方，難解な課題を設定すれば，地理嫌いや歴史嫌いを誘発しかねない。教材としてのアイヌ語地名は，小学校段階でも学習した経験は多く，親しみのあるものと判断できる。今回は，アイヌ語地名を手がかりに，その時間軸と空間軸の広がりを検討するものであり，応用的な学習課題として位置付けることができる。

次に，なぜ，地歴融合した教材として用いるのか述べる。現行の地理歴史科は，世界史ＡまたはＢを必修とし，日本史Ａ・Ｂ，地理Ａ・Ｂから選択するようになっている。ゆえに，日本史または地理のいずれかを選択すると，履修条件を満たす。よって，時間割上の関係で，両科目を履修できる高校は少ない。大学入学後，日本史のみ，地理のみといった履修経験者が大半となっている。

現在，次期の学習指導要領の改訂に向け，準備をすすめている中で，世界史必修を取りやめ，日本史の必修，地理基礎・歴史基礎（地歴基礎）の必修といったいくつかの案が出されている。ここにきて，日本史の必修化の動きが活発になってきた。仮に，そうなると，地理の履修者は激減する可能性があり，大きな打撃を受ける。

このような動きの根底には，2006年度に発生した世界史未履修問題がある。現行学習指導要領では，世界史と日本史の目標には「地理的条件」，地理の目標には「歴史的背景」といった文言が加わり，科目間の連携を強調している。

そこで，筆者は，地歴融合の地域調査の学習課題を設定することで，地理と日本史の有用性を同時に気付かせたいと考えた。地理歴史科が誕生し20年以上が過ぎた。これまで，地理教育や日本史教育（歴史教育）が関係する研究会では，自らの学習内容の意義を強調するのみで，地歴融合の視点にたった具体的な提言が少ないまま推移してきた。よって，今回の教材開発は，これまでの地理歴史科の課題解決に向け，一石を投じようとするものでもある。

2. 教材開発の内容

すでに述べたように，本節では，地歴融合した地域調査の学習課題の教材開発を行う。具体的には，時間配分を100分（50分×２）として，配付資料に基づく，机上での地域調査を行う学習活動とした。

地理Ｂでは「イ　地図の活用と地域調査」，日本史Ｂでは「ア　歴史と資料」の単元内容を想定している。

以下では，本時の目標，展開，評価の順で示す。

１）本時の目標

地理資料，歴史資料を活用しながら，アイヌ民族の歴史と文化に関する時間軸・空間軸の広がりについて，調査活動を通して推測することができる。具体的には，以下のことを学習できるようにする。

●アイヌ隆盛期以前にも，アイヌ語を話す人々が定住していた可能性に気付くことができる（日本史分野）。

●北海道（樺太・千島列島）以南である東北地方（南東北）にも，アイヌ語を話す人々が定住していた可能性に気付くことができる（地理分野）。

２）本時の展開

過　程	教師の指示・発問	生徒の学習活動 （身につけたい知識）
導入 20分 復習 ５分 目的の説明 10分 課題提示 （予想） ５分	前時の復習 ○地歴融合の地域調査の目的の説明 ●地域調査の学習課題 アイヌ語系地名の南限（東北地方）は，どの辺か，諸資料を用いて，地理的位置を推測する。	○空間軸（地理）と時間軸（日本史）の重要性について理解できる
展開	○アイヌ語系地	○アイヌ語地名は，

（調べ学習） 60分 作業１・２ 各20分 比較・推測 20分	名の南限が，どの辺か，予想させる ○作業１ 東北地方の主なアイヌ語系地名（ナイ・ベツ地名）の一覧と白地図（東北地方）を配付し，位置と地名を記す ○作業２ 東北地方の主な縄文土器の出土地（後北式・北大式土器）の一覧と白地図（東北地方）を配付し，位置と地名を記す ○完成した地図を見比べ，気付いたことを書く ○その結果に基づき，アイヌ語系地名の南限を推測する	北海道に広く分布するので，本州以南にあることを予想できる ○白地図の作成を通じて，自然地理的事象（河川・湖沼など）の関係性にも気付くことができる （地図帳を同時に参照） ○白地図の記入を通じて，どのような地理的環境により多く分布しているか，または，分布の特色はどうか，気付くことができる （地図帳を同時に参照） ○両地図の比較から，地理的位置の関係性に気付くことができる ○縄文土器の出土は，そこに生活者がいたことを表すので，アイヌ語系地名の位置と一致すれば，縄文人＝アイヌといった可能性があることに気付くことができる
まとめ 20分 発表・共有 10分 解説 ８分 予告 ２分	○推測結果の発表・共有 ○アイヌ語系地名の南限の可能性について解説 次回の予告	○資料の事実に基づいて，アイヌ語系地名の南限を推測できる ○諸資料の事実からアイヌ語系地名の南限は，可能性に過ぎないことも認識できる

図９　東北地方の北海道式土器の分布
資料）石巻市教育委員会（2003）『石巻市文化財調査報告書第11集』125頁転載

表１　東北地方・北海道のアイヌ語地名の例

地名	読み方	アイヌ語の意味（類推）
佐比内	サッ・ピ・ナイ	乾いた・小石・川
尻　労	シリ・トカリ	山の・手前
白　糠	シラル・カ	岩・上
惣　内	ソ・ナイ	滝・川
似　内	ニタッ・ナイ	谷地・川
紅　内	フレ・ナイ	赤い・川
長流部	オ・サル・ペッ	川口に・湿原・川
品井沼	シ・ナイ	本当の・川
斗　内	ト・カ	沼・川
長　内	オ・サッ・ナイ	川尻・乾いた・川
苫米地	トマム・ペッ	谷地・川
弁　別	ペッ・ペッ	川
反　内	タンネ・ナイ	長い・沢
米　内	イ・オ・ナイ	郡在する・川
佐羽内	サル・パ・ナイ	湿原・上・川
種　差	タンネ・エサシ	長い・岬
浦子内	ウラシ・ナイ	笹・川
比　内	ピ・ナイ	小・川
鎌　内	カマ・ナイ	平たい岩・川

資料）山田秀三（1983）『アイヌ語地名の研究』第３巻
注）上記以外にも、東北地方にアイヌ語地名はある。

３）本時の評価

アイヌ民族の歴史と文化に関する時間軸・空間軸の広がりの可能性について，地図資料と歴史資料の活用と組み合わせをしながら，推測することができる。

【資料活用の技能／地理的・歴史的な思考・判断】

Ⅴ．おわりに

本稿は，アイヌ民族の生活福祉の向上と関連させながら，学校教育の工夫・改善に挑戦しようとするものであった。具体的には，地理学や歴史学の研究成果を，諸資料として組み合わせ，それを用いた高校地理歴史における授業開発を行うものであった。地理学や歴史学の研

究成果として，アイヌ語系地名の南限に注目した。以下では，Ⅱ章～Ⅳ章のまとめを行う。

Ⅱ章では，アイヌ民族の生活福祉の向上との関連を述べた。現在，アイヌ民族に対する差別は，学校教育によって，イメージ化された影響が大きい。生活福祉の対策は，日常生活に関する支援を中心としている。その効果もあり，差別は縮小したものの，完全に払拭できたわけではない。それゆえ，別な視点として，学校教育の工夫・改善することによって，アイヌ民族の歴史や文化の再評価につながることを期待した。

Ⅲ章では，アイヌ語系地名の南限について，歴史学では，どのような研究成果があるのか，また，地理学において，その研究成果を援用し，どのような地理的な事実が明らかになっているのか，整理した。その結果，時間軸の広がりとして，縄文時代・続縄文時代・擦文時代，空間軸の広がりとして，東北地方の定住の可能性があることがわかった。

Ⅳ章では，Ⅲ章の研究成果を一資料と考え，高校地歴科における地歴融合の教材開発の意義と内容を示した。意義として，地域調査の学習課題の事前提示と地歴融合との有用性について触れた。続いて，目標，展開，評価の順で示した。具体的には，地理Ｂと日本史Ｂの導入段階において，地域調査の学習課題として，アイヌ語系地名の南限について諸資料を活用しながら推測させるものであった。

すでに述べたように，アイヌ民族に対する差別は，学校教育にその責任の一端があろう。ゆえに，その差別の払拭には，学校教育の内容の工夫・改善が有効と考えた。加えて，その学習内容は，既存の内容を超えるものが，より効果は高いと考えた。本稿では，それを時間軸と空間軸の広がりの可能性として着目した。

今後は，機会をみて，教材開発の成果を検証し，より適する教材開発に修正していきた。

付　記

本研究では，平成25年度北方圏学術情報センター研究費（生活福祉研究部）の一部を使用した。

本稿の内容は，平成25年度群馬社会科教育学会の大会（平成26年３月）において自由研究発表をした。また，平成24・25年度ポルト成果発表生活福祉研究部（平成26年２月）の一部としてポスター発表した。

注

注1) http : //www8.cao.go.jp/survey/h25/h25-ainu/アイヌ政策に関する世論調査/内閣府大臣官房政府広報室。
※本稿の校正中，内閣官房アイヌ総合政策室によれば，2015年度，アイヌ民族への差別に関する全国意識調査の実施を発表している。その目的として「どういった場面でアイヌ民族への差別を感じるか」実態把握を行う。

注2) http : //www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/ass/ainu_living_conditions_survey.pdf
平成25年北海道アイヌ生活実態調査報告書

注2) http : //tarikiblog2.biog22.fc2.com/blog-entry-513.html を参照

注3) 前掲注２）を参照

引用文献

1) 小野有五：東北アイヌ語地名と考古学，アイヌ語地名研究第15号，pp. 14-15（2012）
2) 松本建速：本州東北部にアイヌ語系地名を残したのは誰か，考古学研究第60巻第１号，p. 55（2013）
3) 平山裕人：アイヌ史のすすめ，北海道企画出版センター，pp. 254-257（2002）

The Possibility of the Development of Geography, History and Materials Southern Limit of Ainu-based Place Name

In this study, we focus on the learning task of the regional survey of the earth history fusion in high school geography history department.

Clue to the Ainu place name system, to perform the development of teaching materials that can guess the extent of the space axis and the time axis.

By leveraging the research results of geography and history, as the southern limit of the Ainu language-based place name, was to identify the Sendai city near.

As a learning task of regional research, we have developed a lesson plan that goals the following points. Also ① Ainu period before, that you can be aware of the possibility that the people who speak the Ainu had settled it, (Japanese History). Also ② Tohoku region, that it is possible to notice the possibility that people who speak the Ainu had been settled (geography).

Key words : Ainu Place Name System, Southern Limit, Geography History Department, Teaching Materials Development, Regional Investigation